

『明治三十年 御題歌共新歌集 全』

合冊『近世三百人一首二編』について

管 宗 次

一、はじめに

本稿は、明治期旧派歌人、彈琴緒による歌書出版事業と旧派歌人交流についての調査研究の一環であつて、これまでの調査研究の論考に続くものである。先にあげてきたものを列記する。

- ・管宗次『彈琴緒『再撰 類題秋草集 初編』について』（『武庫川女子大学生活美学研究所』二〇号、二〇一〇年十一月十六日刊）
- ・管宗次『彈琴緒歌集『桐園歌集』三種について』（『武庫川国文』七十四号、平成二十二年十一月十日刊）
- ・管宗次『『桐園詠草付録』——明治期旧派の歌書——』（『武庫川国文』七十五号、平成二十三年十一月十日刊）
- ・管宗次『『神樂の舎五百首』——彈琴緒の出版事業——』（『武庫川国文』七十八号、平成二十八年十一月一日刊）
- ・管宗次『『類題新年歌作例集』彈琴緒旧派歌人の改暦と新年の歌について』（『武庫川国文』九十四号、令和五年三月二十七日刊）
- ・管宗次著『京大坂の文人——続々』二〇一〇年二月刊、和泉書院、『9、彈琴緒』一二五—一三八頁

ここで、取り上げる『明治三十年 御題歌共新歌集 全』は、皇太后宮（英照皇太后）の崩御によつて、諒闇となつて吉事盛事は全て停止されたことにより、民間の平民の歌書出版事業はどんな対応で採算とのやりくり、商業基盤の苦境をを乗り越えようとしたのかを明らかにしたい。

英照皇太后は、天保五年十二月十三日生まれ、明治三十年一月十一日崩御、孝明天皇の女御、明治天皇の実母ではなく、嫡母にあたる。女御宣下は嘉永元年十二月十五日、嘉永六年五月七日に准后に冊立される。明治三十年一月十一日崩御、明治三十年一月三十日英照皇太后が追号される。諱は夙子（あさこ）、父は九条尚忠で、母は賀茂神社氏人である南大路長尹の娘（菅山）、九条道孝は同胞の弟。

弘化二年九月十四日、統仁親王の妃となり、その翌年に統仁親王が即位、孝明天皇となるに及んで、嘉永元年十二月七日に従三位に叙され、十二月十五日入内、女御宣下、孝明天皇は立后を望んだが、幕府の反対にあい、嘉永六年五月七日に正三位准三宮となり、この経緯があつて、皇后を経ずに皇太后となった。幕府と孝明天皇との政治的な軋轢は、こうした後の身分をめぐつてもあつた。

英照皇太后は能楽をことのほか好み、当時、名人上手と言われた梅若実と宝生九郎に、同じ曲を舞わせ、その芸風の違いを楽しんだと言う①。これは、孝明天皇が能楽を好んだ影響という。

英照皇太后崩御で歌舞音曲などあらゆることが止められたため、歌集出版事業収入を、歌道教授と共に弾家運営にあてていた弾琴緒には、これは切実なる問題であった。『明治三十年 御題歌共進歌集 全』が『近世三百人一首二編 全』と合冊して刊行ということになった出版業者らしい経営の苦衷が、あとにあげる巻末「○社告」に吐露されている。

二、『近世三百人一首二編 全』

『明治三十年 御題歌共進歌集 全』をあげるまえに、合冊されている『近世三百人一首二編 全』について詳細を述べねばならない。

『近世三百人一首二編 全』は、弾琴緒の編輯歌集であるが、端的にいうと、所載和歌短冊の販売目録でもある。谷沢永一によると、近代文学作家の自筆原稿の蒐集が始まったのは、明治後期からで、夏目漱石や尾崎紅葉などのものから、既に古書肆の商品対象であったというが、上田秋成の『胆大小心録』には、自分の短冊の値段や同時代の歌人の短冊の値段を気にしている記述がある、近世初期から、同時代の歌人に染筆を乞い集めるのではなく、好事家や和歌研究対象として短冊を集める人は多かったが、明治後期から短冊蒐集の趣味流行がはじまる。この流行が、後の短冊専門業者の「柳屋」（東京）の目録販売（定期刊行誌で著名人の随筆なども載り、冊子の装丁も洒脱）を生む。

『近世三百人一首二編 全』の秋山光條序文をあげる。

敷島の道をたとり和歌の浦わをあ

される人のしるへなきはたよき友の乏

しくてあらぬ方にまよひ入ては中々に思

撫つるも少からずとか我友琴緒主此

を意てこ、らの書を著し、中に近世

三百人一首は昔のねの長き年月をかけ」序文一丁表

て難波のあしのねもころに物せら

れたれはこの道の奥にいたらんにはよき

友かきにしてこよなきしるへ書にこそ

今度二郎の巻成れるによりてはし

かきせよとこはる、ま、に一言かくなむ

あき山の光條」序文一丁裏

秋山光條は、いわゆる江戸派国学者の流れを汲む国学者である。天保十四年一月月生まれ、明治三十五年二月十九日没で、『近世三百人一首二編 全』が明治三十年十月に刊行されているので、老学者の序文が寄せられていることになるが、この頃、秋山光條は八坂神社宮司を勤めている。秋山光條は世襲歴代の宮司ではないので、寒川神社宮司、出雲大社少宮司、三島大社宮司、八坂神社宮司と転任を経た後、明治三十五年に、東京の水川神社宮司となつて、同年に没している。

もともと秋山光條は、江戸南町奉行所同心秋山和光の子で、江戸八丁堀生まれ、「江戸三男」と謳われ、粹と洒脱で、身ごなしも違つたという「八丁堀同心」の子であった。平田鉄胤、前田夏蔭に国学

を学び、師友に平田派の門人や鈴屋の門人が多く、相川景見、矢野玄道、師岡正胤、権田直助、角田忠行、本居豊穎、井上頼園、久保季慈、青柳高輅、落合直亮がいるが、足利三代の木像梟首事件の首謀者である角田忠行、師岡正胤、青柳高輅などと特に親しかった。

足利三代の木造梟首事件で捕まり、事件後、藤堂家津藩の支藩の久居藩で禁固刑となった青柳高輅、勤皇志士である彼らに心情的に近い藩士もいて、囚人である青柳高輅も比較的にゆるやかな軟禁状態、書見や国文書籍筆写には筆墨の差し入れまであり、牢外の、文久年間のテロの嵐に触れることなく、王政復古の勅令に解き放たれた。明治四年から明治五年、新政府は神祇省を設置したが、直ぐに教部省に改称、「祭政一致」の分離を図った政府は、さらに宮中祭祀を式部寮に移し、式部寮は明治八年には宮内省に移管される。

②③

新政府の祭政一致を近代国家には、そぐわないとした行政運営の改変は、王政復古を標榜していた国学信奉者の志士あがりには、許し難いことであった。

まさに、島崎藤村の『夜明け前』主人公島崎正樹の嘆きを、そのまま映した明治の近代化であった。故地に戻り、静かな余生を終えた神官の筆跡を、本文は活字版と時代に沿いながら、序文は木版の自筆版下で偲べることは旧派歌人とは、なになであったかを考えることになる。家蔵写本に、版本『万葉集略解』を書写したものがある。青柳高輅の自筆筆写本は、上質な薄葉紙に「久居の囚屋にて」として、毎日十五丁から二十丁ほどを写し、そのことを記録している。『万葉集略解』全巻をそっくりそのまま写しているが、大本のものを中本のサイズに写している。学問に打ち込む静謐な姿は、藤堂家支藩

の警護の武士たちにも感銘を与えたようである。

和歌短冊を集めて、販売目録とした歌集『近世三百人一首二編全』序文を、秋山光條に乞う意味はほとんど見当たらない。

弾琴緒の商才というべきは、本文の一丁表の、書名の下に「短冊帖の歌」と小さくあって、同書に掲載の和歌がすべて短冊に各々の歌人自筆のもので弾琴緒のコレクションながら、みな売品であり、価格は相談によるという。弾琴緒の商才もしたが、金品のことを、如何に、品位をもって正確に伝えるかが大切だが、ややもすれば曖昧な表現は読み手を躊躇させる。

『近世三百人一首二編 全』の本文最終丁の裏(二十四丁裏)は、「近世三百人一首二編」が、実はこうした歌書であると明記されており、書名の前に「桐園珍蔵短冊帖」として、陳列展覧した上で販売にあるという。次にあげる。

桐園珍蔵短冊帖 毎年一月初会ニ陳列シテ

来会者ニ展覧セシム

近世三百人一首二編

歌数内訳	春部	七十四首	夏部	三十二首
恋部	六十四首	冬部	四十一首	
	二十二首	雑部	六十七首	

一、此集ハ初編ヨリ範圍ヲ広クシ南朝以後ノ故人淨辨律師、徹書記木下長嘯子、佐川田昌俊、山本舟木、烏丸光広卿、岡本宜就等ノ古筆ヲ編入シ其他ハ元禄以來明治年代ノ有名家ヲ蒐輯ス但明治年代ノ現存人ハ加ヘス

一、此集詠者姓名ノ傍ニ某門等記シタルハ歌人系譜ト古学小伝及鑑定便覧ニヨリ記載ス又某門人ナルヤ詳ナラサルハ記セス

一、此集ハ悉皆短冊ノミニテ短冊帖ニ裝置ス依テ契沖、東麿、真淵、宣長、篤胤等ノ五大人ハ表具シテ幅トナルヲ以テ此集ニハ編入セス

一、明治維新前ハ江戸ト云ヒ維新後ハ東京ト称スルヲ以テ其歌人ノ年代ニヨリニ様ニ記セリ見ン人恠ムコト勿レ

一、此集中ニ入タル古今有名家自詠自筆ノ短冊ハ余分沢山有之ニ依リ望人ニハ相当ノ価ヲ以テ譲渡スヘシ因テ其人名ヲ記シテ御照会ヲ乞

よつて、書名に「近世」と冠して、「桐園珍藏短冊帖」とも題していることの詳細が明らかに。販売した短冊には、弾琴緒の豆印が押されている。

現存の歌人の短冊はのせないというのは、当然の配慮であつた。奥付には、次のように「明治五百人一首二編」の広告文と刊記が載る。

弾琴緒撰編

上美濃紙摺美本一冊

○明治五百人一首二編

定價

金四拾錢

但出詠者ニ限り正価郵税共前

金三十二錢郵便切手ハ二割増

短冊メ切三十年十一月三十日限

此書ハ前編ノ通皇族華族以下有位ノ貴紳及有名宗匠ヨリ現今ノ歌人達五百名ヲ集メ秀歌一首宛精選シ四季恋雜ニ部分シテ出版ス尤此書ハ去明治二六年予約広告シテ九分募集済ノ處先年来多忙ノ為メ出版延期セシカトモ既ニ当今撰歌済ニテ何時ニテモ出版可致候間前期ノ期日迄四季恋雜ノ秀歌六葉ヲ上等短冊ニ認メ之レニ予約金ヲ付ヘテ至急御郵送被下度伏テ希望ス

明治三十年十月二十一日印刷

正価二十五錢

同 同 年十月二十七日發行

大阪市東区高麗橋三丁目五十九番屋敷

編集兼發行者

彈舜平

大阪市南区鰻谷東ノ町百七十五番屋敷

印刷者

前田菊松

この広告文と刊記は、『近世三百人一首二編 全』と『近世三百人一首二編 全』を合冊した『明治三十年 御歌共進歌集 全』にも、広告刊記を、そのまま用いているが、『近世三百人一首二編 全』は「正価二十五錢」、明治三十年 御題歌共進歌集 全は「正価三十五錢」となっている。当然のことであろうが、『近世三百人一首二編 全』を合冊していない書冊形体のものはないようである。これは、先にあげた『明治三十年 御題歌共進歌集 全』の巻末、十四丁裏の「○社告」の「一、御題歌集ハ余リ紙数少ク候に付今般發行の近世三百人一首二編と合本として送本す」は額面通り受け取れそうである。

明治三十年は英照皇太后崩御のために中止になったが、題は「松影映水」で、続く明治三十一年は英照皇太后喪中のために中止、題は「新年雪」であつた。^{④⑤}

そこで、『明治三十年 御題歌共進歌集 全』は、既に集められたものといえ、また途中からは和歌を集められることは難しくなり、かと言って既に集められた和歌を如何に扱うかの苦衷の裁量の結果、出版『近世三百人一首二編 全』との合冊となつたようである。繰り返して述べるが、『近世三百人一首二編 全』のみの装丁

歌集は刊行されている。

三、『明治三十年 御題歌共進歌集 全』

『明治三十年 御題歌共進歌集 全』の書誌と所収の和歌をあげる。

『明治三十年 御題歌共進歌集 全』書誌

・書名『明治三十年 御題歌共進歌集 全』題簽題名による。

内題「御題歌共進歌集 明治三十年」

・丁数 本文十四丁、序跋文など無

・書形 中本一冊、和装活字本

・一六九首所載、巻頭の十首は撰詠されたもので、あとの一五九首については、次の注があげられている。

「○集歌 此集中には高吟秀詠もあれども予約外の分は撰歌に入れざるもあり又歌意通し難きあり題意に適せざるあり「てにはは」及係結辞の連へるあり自他の反対せし歌もあれど其儘載録す」

・刊記 合冊の刊記があり、独自の刊記は無い。

明治三十年十月二十一日印刷

同 同 十月二十七日發行

合冊の『近世三百人一首二編 全』は、独自の単行本もあり、題簽も『近世三百人一首二編 全』と刷られて、こちら方が流布したようである。

独自の単行本の『近世三百人一首二編 全』の書誌をあげる。好事家による短冊収集の流行が、幕末期から明治におよび、特に明治時代後半には盛んで、短冊を専門とする骨董商の老舗の創業期がこの頃に集中している。

『近世三百人一首二編 全』書誌

・書名「近世三百人一首二編」、本文内題「近世三百人一首第二編 短冊帖の歌」

・書型 中本一冊、和装活字本、秋山光條自筆版下序文一丁木版

・丁数 秋山光條序文一丁、本文二十四丁

この序文と本文を、「御題歌共進歌集 明治三十年」と合冊して明治三十年 御題歌共進歌集 全の題簽を貼り表紙としている。

次に、『明治三十年 御題歌共進歌集 全』の和歌をあげる。

巻頭十首は、勅題の撰歌で、本来なら宮中歌会始の榮譽に浴するのであるが、宮中の喪事でしめやかなうちに一切が閉じられていた。

松影移水

第一等 上野国勢多郡

粕川村

猪熊可広

君か代の千世をかさぬるいろとみむ松かけひたす竹かはのみつ

第二等 伊予国温泉郡

松山市

潮見琢磨

あすか川水にうつれと松の葉のいろはふち瀬とかはらさりけり

第三等 越後国北蒲原郡

竹俣村

菅 業広

川かみの湯津いはむらのいは根松なみのみとりに影うつすなり

第四等 摂津国武庫郡

西宮町

阿部光忠

いす、川か、みの淵にかけみえて千代もおいせぬ松のいろかな

第五等 三河国渥美郡

福江村

富田篤翁

池みつのみとりいろこきひとむらは汀のまつのうつるなりけり

第六等 大阪市南区

鰻谷西ノ町 加納鶴處

くみとりてさ、けまつれや仙人もよもきか島のまつのしたみち

第七等 陸奥国南津軽郡

六郷村 宇野祐三

亀あそふ山したみつにあしたつの巢こもる松のかけそうつれる

第八等 三河国宝飯郡

木茂村 山本道清

みなそこにひそめる龍かとはかりに岸の老まつかけひたすなり

第九等 羽後国山本郡

藤琴村 水元勝光

神垣のまつをひたせるみたらしの水はそこまてみとりなりけり

第十等 石見国邑智郡

矢上村 服部利夫

なかれゆく水には色のうつれともまつのみとりは汲れさりけり

これらの榮譽に浴しながら、「諒闇」にあたり、華やかな場を得ることがなかった撰歌のあと、彈琴緒の編輯歌集に投稿の勅題「松影映水」を詠みこんだ和歌が続く。

○集歌

此集中には高吟秀詠もあれども予約外の分は撰歌に入れざるもあり又歌意通し難さあり題意に適せざるあり「てにはは」及係結辞の違へるあり自他の反対せし歌もああれど其儘載録す

として東京をはじめとして北海道や九州の各地を三都、国別にあげることが、彈琴緒の社交交流の限界とも広さとも歌数から読み取れるものがある。

地域別に、歌数をあげる。

東京十八首、京都三首、大阪二十一首、以上が三都、山城一首、和泉二首、摂津二首、伊勢十一首、三河十一首、駿河二首（一人で二首投稿している）、伊豆一首、武蔵二首、下総二首、常陸二首、近江二首、飛騨三首、信濃十六首、上野五首、岩代六首、陸前一首、陸奥四首、羽後四首、北海道三首、加賀一首、越後二首、佐渡三首、丹波一首、因幡一首、石見二首、播磨七首、周防二首、長門二首、紀伊八首、淡路一首、伊予四首、豊前七首、肥前三首、肥後三首、続けて長歌短歌一首、末尾に彈琴緒 妻の梅子、娘八歳愛子、前年度の『御代の花』に掲載もれであったのであろう、本文最終丁の裏に、「〇二十九年御題 寄山祝」の和歌が、

上野碓氷郡

碓氷嶺村

坂西高嶺

大君のよろつ世かけてうこきなきやまは皇国のすかたなりけり

が載る。ついであるが、明治三十年は、英照皇太后の崩御で御歌歌会始中止であったが、翌年の明治三十一年は英照皇太后の喪中で中止、勅題は「新年雪」と決まっていた。

四、三都の歌人と和歌

『明治三十年 御題歌共進歌集 全』の三都の所載和歌をすべてあげる。

東京 正二位 池田茂政

葉かへせぬ松は常磐のいろみえて水にも千代のかけそうつせる

同 従三位侯爵 前田利嗣

やまみちもとほくひらけてゆけとく松の影みるたにかはの水

東京 正三位伯爵 津軽承昭

わし津山のほる朝日にはま松のかけみるなみはみとりなりけり

同 正三位 前田利聲

色かへぬときはの松もたに川のみつのなかれにかけうつるなり

同 従五位 諏訪忠元

ちとせ川おなしみとりの水のうへにうつるもひさし岸の松か枝

同 下谷区上野 桜木町 青木 修

濁なきみその、池にえたたれて千とせのかけをうつすまつかな

同 先光清風

ゐるたつのすかたもさやに池水にうつる松か枝かけのとななり

同 下谷区 中根岸町 申橋隆美

こ、のへの御池のみつにかけうつる松こそ君か千代のともなれ

同 豊田三叔

朝日かけさすやみとりのかけみえて松に千年をちきるいけみつ

東京 従四位子爵 七十七歳

千年ふるときはの松のかけみえつしたゆく水もおなしみとりに

増山正治祖母 増山深雪子

同 従四位子爵

はるにあふみとりの松のなみの花十かへりにほふやとの池みつ

同 子爵土岐頼知

天皇のめくみもふかきいけみつにちとせをしめる松のかけかな

同 室 土岐常磐子

さくら田のみほりにうかふ松かけは治る御代のすかたなりけり

同 同氏 息女 同 米子

君か代のめくみそふかきいけ水にうつれる松のかけゆたかなり

同 同氏 息女 同 いく子

ときはなる松のちとせのかけとめてことさらする昆陽の池水

同 従四位男爵 酒井忠淳息女 酒井鏐子

さ、浪もた、ぬ御国のいけみつにときはの松のかけそうつれる

東京 諏訪忠元室 諏訪晴子

朝つく日にはへるいけのさ、波に千代のかけみる岸のまつか枝

同 牧野かつ子

そこきよき池のみきはのまつか枝はかけも常磐のみとり也けり

京都 八坂神社 宮司 従六位 秋山光條

影うつるいけのか、みのきよければ亀こそあそへ松の葉の上に

同 下京区

間之町七條 苗村宗元

いけの面にうつれる松のかきみれは水のみとりも常磐なりけり

同 同区

大仏本瓦町 西村宗元

唐さきのまつ影うつるみきはにはとほにみとりの浪そたちける

大阪 東区

瓦町二丁目 中村良顕

かけうつす松の千とせをわかみつにもひとり司くみやそへけむ

同 同区

平野町一丁目 安井朗安

苔ふかきいはねのまつ影うきてみとりにやますたにの青ふち

大阪 東区

高麗橋二丁目 伊藤斎庸

ときはなる松のしたゆく河みつはいつも千年のかけひたすなり

同 同区

府立博物館 米岡斯近

幾千代かまつのみとりをうつすらん五十鈴の川のきよき流れに

同 同区

今橋二丁目 吉田 基

たけ川の水にちとせをちきるらむまつも常磐のいろをふかめて

同 同区

豊後町 福島正察

千代やちよすめるか、みの池水に御代のさかえをうつす松か枝

同 同区

島町 中山正次

なみた、ぬ与謝のうみ辺のはま松は千尋の底にかけうつすなり

同 同区

高麗橋三丁目 武内鶴子

松か枝のかけをうかへて千代までも清くすむらん常磐井のみつ

同 同区

豊後町 飯田政子

まつか枝のみとりをうつすいけ水に君か千とせをうたふとも鶴

大阪 西区立売堀

北通一丁目 楠原志朗

浪た、ぬ御池のみつにかけさしてしつけき代をや松もしるらん

同 同区江戸堀

南通一丁目 平井美英

さ、ら波千代をよせくるいけ水にみきはの松のかけそうつれる

同 同区江戸堀

北通二丁目 崎山しう子

澄わたる御池のみつにかけみえて千代もさかえむ園のおいまつ

同 南区 八十九翁

天王寺村 真鍋豊平

くもりなきか、みの池にかけとめて千年の色をみするまつかな

同 同区

難波新地 吉田好信

住の江にうつろふまつのふかみとり深きめくみの御代そ久しき

同 北区

天満神社 寺井種清

まつか枝のみとりうつしてみかは水かはらぬ御代の影そ久しき

同 同区

同 神社 滋岡従長

岩ふちのみつはいよ／＼みとりにて一しほふかき松のいろかな

大阪 北区中之島 八十翁

六丁目 甲斐高嶺

老松のすかたをうつす御園生のいけのか、みは千代もくもらし

同 同区

樋上町 牛尾光碩

あまつ日のひかりか、やく水の上に松の千年のかけそうつれる

同 同区天満橋筋

二丁目 北山竹窓

波た、ぬみにはの池のみの面に常磐のまつのかけそうつれる

同 同区天満橋筋

二丁目 同 きく子

あをふちの千尋のそこに影みえて峰よりうつるまつのむらたち

同 同区

相生町 玉澤冬子

門まつのみとりのかけそうかひけるまつ波あくる若水のうへに

以上が三都であるが、「撰津」からの出詠者は二人で、その一首は、

撰津 住吉神社宮司

從四位男爵 津守国美

宮居せしそのかみよりや住よしの池にまつさへかけうつしけり

となれた詠みぶりであるが、住吉社の景を詠んだものの、最終的な官

位は從三位で、没年は明治三十四年で七十二歳、当時の醜聞を載せる

新聞紙には「殿様（津守国美）は何処で亡くなられたやら」とあつ

て、不幸な晩年であつたようであるが、短冊や懷紙に染筆には「從

三位」「男爵」の肩書を添えたものが多い。大阪での、「八十九翁

真鍋豊平」や、松園社の和歌社中の運営をもつて勢力を誇つた滋岡

滋長など、旧派歌人で、彈琴緒と懇意な歌人は和歌を寄せている。

『御代の花』や、彈琴緒（桐園）の出版歌集は中村良顕序文が多

く、歌集出版の委託依頼を受けた場合は、中村良顕の序文執筆の仲

介もしていたようであるから、『明治三十年 御題歌共進歌集 全』

にも中村良顕の和歌所載、また大阪の出詠者は、中村良顕門人が少

なくない。

また、先にあげた秋山光條が、「京都」で出詠者三人のなかにあつ

て、

影うつるいけのか、みのきよければ亀こそあそへ松の葉の上に

と出詠しているが、八坂神社宮司は晩年の僅かな任期で、先にも述

べたが明治三十五年には、東京氷川神社宮司になって、翌年没して

いる。また、『日要新聞』を発売したり、あまりにも激しい論調の

国体発揚に、官省から新聞発行停止が命じられて、地方の神社を転々とさせられている。世に余された時代遅れの国学者は、明治後期には、官幣大社の宮司に居場所を据え、和歌に思いを託すしか無い人もいたが、彈琴緒はそうした有名な人を目ざとく見つけて序文執筆者にまつりあげる。そうした、したたかさもあって、明治時代末まで大阪にあって旧派の歌書を出し続けることができたのであろう。

五、地方歌人の出詠

『明治三十年 御題歌共進歌集 全』は、歌集出版がはばかられたなかでの歌集のために、地方からの出詠者が少なく、かえって出詠者の名前に、社中単位に出詠ではないことから、その地域での独自の旧派歌人を拾い出すことができる。いくつかあげる。

・東京 河合象子

・淡路 武田信城

・加賀 石川昌三郎

の三人は、旧派歌人で学統も和歌の師も、所謂、鈴屋に本居家の門人でも、平田派の直門とは異なる。また、各々、幕末期から明治、近代国家のあゆみのなかに人生をおくった歌人たちである。

・河合象子⑥ 旧派歌人で、静岡県浜松市北区細江町気賀一五四六に、歌碑が立つ。河合象子没後、甥の鈴木庫太郎が、河合象子の和歌遺稿をまとめたものがある。鈴木庫太郎は、東京帝国大学法科を明治三十一年に卒業後、日銀ロンドン支店に勤めて、明治三十七年二月の日露開戦の外資募集にあたり激務をこなした。河合象子の父は吉田藩藩士熊之進、早く父が病死したため、母の実家、浜松の気賀の本陣で育ち、縁あって、紀州藩医で新宮の河合松哲の後妻とな

る。幼少期より、和歌を詠む家庭環境であったが、夫の職務もあって、人生に度々、江戸、東京に住居を移している。波瀾万丈の人生な女性で、夫に先立たれて、浜松女学校教師の職を得たりしながら、中歌会始に毎回、和歌を奉詠し、撰歌に選ばれた。明治四十一年に、東京から気賀の鈴木庫太郎邸に寄寓、明治四十二年十二月十六日没、享年七十五歳であった。

東京

河合象子

朝つく日にはへるいけのき、波に千代のかけみる岸のまつか枝

・武田信城⑦ 淡路からの出詠者は、武田信城一人である。武田信城は、淡路の阿波藩の付家老、稲田家の家臣で水不足の淡路では重要な職務たる水役人で、稲田騒動に巻き込まれることの実害が薄かったように財力もあつたかと思しい。多くの稲田家家臣が、北海道移住の辛酸をなめたが、武田信城は淡路から北海道移住に及ばず、『類題真清和歌集』などの私家版歌集を彈琴緒の桐園出版から刊行している。歌集の『類題真清水和歌集』の書名は武田信城が水役人であったことによる。彈琴緒とは昵懇の間柄というよりは、彈琴緒の出版依頼の上客であった。

淡路 津名郡

物部村 武田信城

いはふちにかけをうつして山まつのみとりをかはす千代の色哉

・石川昌三郎⑧ 『富士谷御杖の門人』をまとめる折に、富士谷御杖の研究が他の国学や近世和歌、歌学の研究に比して非常に手薄と感じた。富士谷御杖は和歌が真のものたるには、文法研究と和歌実

作とを両輪と考えて励めねばならないと説き、門人たちは月次歌会と「四具」「かざし」「あゆい」などの研究理解に専念、語彙分類と證歌の検証にあたる。文法研究書の作成転写書写を丹念に繰り返し返している。方法や分類に新たな角度を見出しては、末書を作ることに

よって、如何にその文法理論が正確に理解出来ているかの確認をしているかのである。抽象的で難解な理論が理解できることを楽しんでいような彼らは、和歌は単に花鳥諷詠の感興を託すものとは考えていなかった。富士谷御杖の一門は、京都と大阪、また加賀、北陸に多かった。それは、月次歌会の記録を丹念に追うと明らかになったことであつたが、与謝野鉄幹の父、与謝野礼蔵も月次歌会に参座している。真宗大谷派や浄土真宗や、東京に遷都があつても、京都から離れることができない寺社と寺社に関わる伝統品製造業者や納人品業者、そして北国街道から日本海にぬける街道沿いに点を置いたように、北辺門の門人が散在している。石川昌三郎も、京都での福田美楯や赤松祐似の月次歌会に熱心な参座者であるが、『明治三十年 御題歌共進歌集 全』に、石川昌三郎が「加賀」からは一人しかいない出詠者というのも、地域社中単位の投稿ではなく、石川昌三郎は住居からいっても富裕層の町人と判ぜられる。

加賀 金沢市

味噌倉町 石川昌三郎

いは間もるあさき水にも千代のかけふかきみとりをうつす松哉

五、弾琴緒家の人々

『明治三十年 御題歌共進歌集 全』は、編集に和歌も精粗ばらつきがあり、歌数の少なさもさびしさを感じさせる。

諒闇にたいして、出詠を控える人が多かったのは、当然のことながら、既に寄せられた和歌を生かすしなくては出版されたわけであるが、弾琴緒は地域別の部書に載せず、歌集巻末に「○追加」として、弾家の一族の和歌を列記している。

弾琴緒は、男子は夭折などで、跡取り息子はなかった。娘の愛子、桐園を継ぐかたちで、婿養子を能楽の家から、学習院院長乃木希典の仲人で迎えた（弾家家伝による）。弾愛子は、良家の子女に仮名書き書と和歌の手解きをして、父弾琴緒のあとを保ったという。婿養子が大変な美男で、愛子が一目で決めたとか、弾家の家伝で面白い話が随分とあるようである。

○追加

大阪 東区高麗橋

三丁目

弾琴緒

老まつ千年をうつすいけ水にうつれる松の影そひさしき

同 同 琴緒妻

同 同 梅子

かけうつす水のかゝみに松か枝は千代へてのちに老をしるらむ

同 同 同女 八歳

同 同 愛子

朝日川みとりふかむる老まつは千代よろつ世もかけうつすらん

佐々木信綱が父の歌会で、やはり「八歳」と署名に添書きした短冊を時折みかけるが、幼年だけでなく、老人になったら署名の年齢を書き添える。短冊の作法として、女性には「裏名」と定まっているが、老人になったら、年齢と共に「媼」と、幼年の場合は「幼書き・お

さながき」とよんで多少の足りない和歌を詠んで染筆しても、こと厳しくは扱わない。樋口一葉の和歌短冊で、「一葉」署名、また短冊表署名は、すべて贋物である。これまで、数枚みたが全て贋物である。乃木希典も旧派歌人の書式作法は心得ている。

弾琴緒の娘、愛子も和歌の世界では、所謂「惣領娘」の扱いを受けていることがわかる。

むすびに

この頃、よくうたわれた唱歌、稲垣千穎作詞の「蛍の光」の3番と4番では次のような歌詞がある。^⑨

筑紫のきわみ陸の奥

海山遠く隔つとも

その真心は隔て無く

一つに尽くせ国の為

千島の奥も沖縄も

八洲の内も護りなり

至らん国に熟しく

努めよ我が背恙なく

『小学唱歌集初編』明治十四年刊で、国民の日本は「筑紫のきわみ陸の奥」から「千島の奥も沖縄も」という帝国版図の意識が明確になる。明治十年代から投稿歌集や、類題歌集は争うように北海道や沖縄からの歌人とその和歌を載せることに熱心となる。

『明治三十年 御題歌共進歌集 全』も、北海道からの出詠者を三人載せており、場所も二箇所である。

北海道 胆振国

室蘭港 三橋中雄

亀の尾のいはねかに、る瀧の糸をそむるは松のみとりなりけり

同 石狩国厚田郡

厚田村 萩原泰能

こすゑには鶴巢こもれる老まつのみいけにうつる影の長閑けさ

同 同

同 佐藤尚光

松影のうつれるみつに亀いて、千代よろつ世のさかえみすらむ

北海道からの出詠者があるが、沖縄からの出詠者は皆無である。

沖縄は、士大夫階級・士族階級の「親方・ウエーカタ」や「親雲上・ペーチン」は、江戸時代の薩摩支配のなか、桂園派の流れを汲む歌人が多く、必ずといってよいほどに、当時の類題歌集や投稿歌集に和歌が載るが、沖縄の歌人グループは、もともと弾琴緒の出版歌集とは縁が薄く、首都東京を中心とする薩摩藩閥の志士あがりの歌人グループとは、大阪の町人が相手であった桐園出版とは別世界であった。^⑩

幕末期から明治に、薩摩藩は京都の桂園派の歌人たちを師匠としてきたために、宮中御歌所が、桂園派に独占されることとなる。弾琴緒編集の歌集に沖縄からの出詠者がないことは、自然な流れであった。

『明治三十年 御題歌共進歌集 全』は、英照皇太后の諒闇で、商業出版にのせることが、はばかられて、書名にも差し障りの無い物を選んでいる。出版しようとして、和歌は幾らか既に寄せられて

おり、出版中止するのも難しい状態であった。そこで、単行本として出版する『近世三百人一首 全』と合冊して販売したのが『明治三十年 御題歌共進歌集 全』である。

よって、『明治三十年 御題歌共進歌集 全』という書名題簽の合冊本と『近世三百人一首二編 全』という書名題簽の本が存在する。しかし、『御題歌共進歌集』だけの歌集本は作られていない。

弾琴緒の歌集出版事業も初期の頃のように家内の活字印刷でできる時代ではなくなり、すべて印刷専門業者に任せることとなっていた。

宮中歌会始に和歌を詠むこと、撰歌の荣誉に無位無官の国民が浴することは、大日本帝国の国家事業、それに参加できることであったが、「諒闇」をめぐる華族や財閥などと平民との立場や意識の差異は、はっきりとしたものがあつた。

華族たちの歌会歌集は、大本、奉書紙、大和綴、彩色木版刷の豪華なもので、印刷部数もごく少数なものであつた。同じ「勅題」を奉詠していると言っても、大量に印刷する弾琴緒の和装活字本の中本一冊に所載されることに喜びを感じる人々と、別世界に住んでいる人々と勅題の「歌題」は同じでも、歌集印刷物となると全く別物、別世界をみていたと言えるかもしれない。しかし、ともに近代国家の御代の栄を奉詠する御民の喜びは大君の御前には等しいというのが、宮中歌会始であつた。

また、旧派を敵視する新派の歌集も洋書の詩集を意識してアールデコデザインをこらした高価な本で、弾琴緒編集の歌人たちとは出会ふことはなかった。

注

① 古川久『明治能楽史序説』一九六九年刊、わんや書店

② 上田萬年『国学者伝記集成続編』一九三五年刊、国本出版社、334～338頁

③ 川出清彦『大嘗祭と宮中のまつり』名著出版、1990年刊。

④ 菊葉文化協会編『宮中歌会始』一九九五年四月刊、毎日新聞社

⑤ 菊葉文化協会編『平成の宮中歌会始』二〇〇九年九月刊、日本放送出版協会

⑥ 『河合象子遺稿』昭和六年十一月五日刊、鈴木庫太郎刊

「ココログ」『河合象子・俳人十湖賛歌』十湖外伝 歌人河合象子の生涯（開始、(1)～52）。河合象子の生涯をたどった労作で、印刷出版物で読めぬことが惜しまれる。

⑦ 郡俊明『「類題真清水和歌集」解題・翻刻(一)「あわじ」3号・淡路地方史研究会（淡路地方史研究会会誌十九号）、昭和六十一年一月二十六日刊

⑧ 管宗次著『富士谷御杖の門人』臨川書店

⑨ 堀内敬三・井上武士『日本唱歌集』1982年刊、岩波文庫

⑩ 高良陸輝編著『近代沖繩集』1934年刊

（付記） 武田信城は信起とも署名したようで、郡俊明氏より多くの御教示を給わった。ここに明記して謝意申しあげる。

（すが・しゅうじ 本学名誉教授）